

二〇二四年度の活動

概要

史料編纂所は、古代から明治維新期にいたる前近代の日本史史料を研究する東京大学の附置研究所である。国内外に所在する史料の調査・収集と分析をおこない、これを日本史の基幹史料集として編纂・公開している。一九〇一年の『大日本史料』『大日本古文書』の刊行開始以来、史料の性格に応じて新しい書目を加えつつ、これまでに二、二〇〇冊以上を刊行してきた。研究部は、教授一八名、兼任教授一名、准教授一八名、助教一六名、特任助教一名、客員教授一名から成り（二〇二五年一月一日現在）、あわせて技術部（史料保存技術室）、図書部、事務部を擁している。

基幹史料集の編纂・刊行によって前近代日本史研究の基礎を支えるとともに、蓄積した史料情報や研究の成果を幅広く学界・社会・市民に提供・発信する努力を重ねてきた。二〇一〇年からは「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」としての活動を開始した。第四期中期目標期間（二〇二二―七年）においては東京大学における唯一の文系拠点となっており、共同研究に参加いただいた所外研究者の協力を得て、二〇二四年に行われた第四期の中間評価ではS評価を獲得した。

また、特にコロナ禍以来、史料編纂所が歴史情報処理システム（SHIPS）から提供する史料情報・歴史情報の有用性・重要性はひろく認知されるようになった。情報基盤等については五年ごとにリプレースを実施して、最新・最適の状態を保つよう努めている。

二〇一九年一〇月から日本学術振興会（JSPS）の委嘱を受け、人文学唯一の拠点機関として活動してきた人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業については、二〇二三年度からは後継の人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業が開始され、東京大学が中核機

関となつて史料編纂所・社会科学研究所が連携して事業を推進している。本所は人文学分野について構築推進事業の成果を継承し、博物館や資料館、自治体、大名家・公家関係文庫などの多彩な史料所蔵機関と連携して、史料のデジタル化や公開を進め、わが国の文化・学術資源の継承と普及に努めている。このほかの学内連携としては、地震研究所との連携による地震火山史料連携研究機構がある。二〇一七年度から活動を開始し、歴史学者と地震学者・火山学者の協力による地震活動や火山活動の長期的な情報の収集や分析を継続している。また、二〇二三年一二月からは空間情報科学研究センター（CISIS）を主管部局とするデジタル空間社会連携研究機構（DSS）にも参加し、荘園絵図データを用いた連携システムの構築などを進めている。

史料のデジタル化や公開推進事業は、共同利用・共同研究拠点としての活動や、人文学・社会科学データインフラストラクチャー推進事業・同強化事業などとも相まって、全国の史料所蔵機関からご理解・ご協力を頂いている。二〇二四年度には、横浜市ふるさと歴史財団、立花家史料館・柳川古文書館、和歌山県小川八幡神社・和歌山県立博物館、沖縄県立博物館・美術館など複数の機関と連携し、各機関が所蔵する史料の画像を本所のウェブサイトから公開することが可能となった。

一方、史料編纂所の研究者は、個人および各種のプロジェクトによる共同研究など、多様な研究活動に従事し、また、大学での学部・大学院教育への参画、PDや若手・外国人研究者の受け入れを通じ、国際的に通用する日本史研究者の育成にも貢献している。研究所の基幹史料集や、個人・チームによる研究成果（著作）の一部は、東京大学のサイト「東京大学教員の著作を著者自らが語る広場 UTokyo Bibliopara」から紹介されている。

また、二〇一九年度からIR・広報室を設置し、研究マネジメントの強化を図っている。研究広報活動を積極的に展開し、本所HP・公式X（旧Twitter、フォロワー数七、〇〇〇余）での広報に加え、プレスリリース・大

学本部広報での情報発信を行い、EAJRS（日本資料専門家欧州協会）年次大会への参加（ブルガリア・ソフィア大学）、オープンキャンパスでのライプ配信などを実施している。教育機関からの見学依頼も増加しており、その対応も行なっている。要覧・所報・研究紀要等の編集を担当するほか、外部資金獲得等についても所内にさまざまな情報を提供し、史料編纂所の研究力強化を支援した。

なお、二〇二五年度から附属史料学協創センターの設置が認められ、新たに活動を開始することとなった。これまで史料編纂所が一五〇年にわたり取り組んできた史料の調査・整理、修復・保全・複製作成といった営みについて、その手法や経験値を可視化・汎用化して広く学内外の諸機関と共有し、歴史史料や学術資源の保全と継承に貢献する取り組みを進めていく。

【史料集の編纂と出版】

史料編纂所は、古代史料部門、中世史料部門、近世史料部門、古文書・古記録部門、特殊史料部門を置き、部門ごとに担当の基幹史料集を定めている。基本的に二〜三人のチームを組んで編纂を行い、それぞれ二〜三年の周期で編纂・出版を継続している。現在の刊行書目は三〇を超える。

本年度は、以下の史料集の刊行を進めた。

- 『大日本近世史料 細川家史料二十九』
- 『大日本近世史料 市中取締類集三十三』
- 『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之八』
- 『大日本古文書 家わけ第十九 醍醐寺文書之十八』
- 『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原訳文編之六』
- 『大日本古記録 後法興院関白記一』

新たに出版が開始された『大日本古記録 後法興院関白記』は、史料編纂所がこれまで継続して刊行してきた公益財団法人陽明文庫所蔵の近衛家伝来歴代関白記の一つである。このほかに編纂を継続しているシリーズとして、『大日本史料』『大日本古文書 幕末外国関係文書』『大日本維新史料 類纂之部』『正倉院文書目録』などがある。

近年、出版をめぐる状況は、ますます厳しさを増している。とくに基幹史

料集のような複雑な組版のある重厚・精緻な出版物については、制作に必要な技術者等を確保するのが難しくなっており、書物の形をとらない成果公開の方法について、本格的に検討すべき段階にきている。

基幹史料集の編纂事業と並行して、国内外における組織的かつ系統的な史料調査・収集を継続して実施している。二〇二四年度の史料調査報告は、本誌「史料探訪」項に掲載している。

【画像史料解析センターの活動】

画像史料解析センターは、センター長一名・専任教員三名・兼任教員三名・客員教授一名・学術専門職員一名の計九名のスタッフと、客員教授に滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科の佐藤亜聖教授を招聘して活動した。

センターの教員は、それぞれ絵画史料分野（第一分野）・画像史料分野（第二分野）・古文書画像分野（第三分野）という三つの分野に所属して研究活動に従事している。これら三つの分野において、センターの専任・兼任教員のほか、センターに所属しない所員も代表者を務めるプロジェクトが研究を進めている。

二〇二四年度は、宮廷調度品の画像史料研究、長篠合戦図屏風、島津領国絵図、莊園絵図、歴史図像学研究、近世都市図解析（以上、絵画史料分野）、近世・近代摺物画像、古写真研究、戊辰戦争期摺物画像研究（以上、画像史料分野）、電子くずし文字典データベース開発、本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究、花押彙纂等の花押画像データベース統合化、金石文拓本史料の整理と公開、離島史料研究、犬追物関係資料研究、中世花押の編年研究、禅宗史料画像研究、泉涌寺書画研究（以上、古文書画像分野）の一八プロジェクトが研究活動を行なった。

このうち、莊園絵図PJは、『日本莊園絵図聚影』釈文編四（中世三・古代補遺）が昨年度刊行されてシリーズは完結したが、引き続きデータ整理の作業を実施した。古写真研究PJでは、センターとJSPS科研費二三K二五三五一との共催、文化庁の後援により、ワークショップ「写真の技法識別と取り扱い・保存」を開催したほか、横浜開港資料館所蔵木村喜毅関係古写真と、海の見える杜美術館所蔵中嶋待乳関係古写真の調査・研究報告書を刊

行した。これ以外の各PJでも、それぞれ史料の調査・撮影とデータの蓄積・解析を進めた。なお、こうした各PJの活動は、それぞれ科研費などの外部資金による共同研究に発展することも多く、所内外の研究活動の活発化に寄与している。

また、本所の歴史情報処理システム上において画像史料関係のデータベースを公開し、他機関のデータベースとの連携にも取り組んでいる。これらのデータベースを維持・拡充するため、順次システム改修やデータの追加・修正作業を実施しており、今年度は金石文拓本データベースのシステム改修を行った。その他の画像系データベースについても、二〇二六年度に予定されているリプレースを控えて、システム改修やデータ保全などの課題に関する検討を開始した。

センターにおける調査・研究の成果や活動記録などを公表する媒体としては、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇四号（二〇二四年五月）・第一〇五号（二〇二四年九月）・第一〇六号（二〇二五年一月）を発行した。現在、第五〇号（第一一五〇号総目次）及び第八七号以降の近刊分は、東京大学学術機関リポジトリからPDF版をインターネット公開している（ただし、同リポジトリで公開しているPDF版では、許諾の問題から一部の図版を非表示にしている）。なお、この『センター通信』は基本的に個人への配布は行なっていないが、その他のセンター刊行物も含め、配布を希望する大学・図書館・博物館・美術館・教育委員会などの機関には積極的に寄贈している。今年度から配布申し込みを受け付けるための『刊行物送付依頼フォーム』を本所ホームページ上に開設した。

【近代代日本史情報国際センターの活動】

前近代日本史情報国際センターは、史料情報集約化ユニット、史料情報資源化ユニット、歴史知識高度利用化ユニットの三研究ユニットと、二〇二〇年に史料情報資源化ユニットの下に付設した原本史料情報資源化ミニユニットで構成され、研究業務を支える情報支援室と目録室が付属している。二〇二一年より、歴史知識高度利用化ユニットのもとで、データ駆動型歴史情報研究基盤の構築プロジェクト（データ駆動型PJ）を実施している。上記の

ような体制により、本センターが中心となって史料編纂所の歴史情報研究を展開している。

日本学術振興会（JSPS）の人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業（二〇一八～二〇二二年度）の継続事業として二〇二三年度より開始したJSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業（データインフラ強化事業）において、史料編纂所は社会科学研究所とともに中核機関としての役割を担っている。本年度は、立花家史料館所蔵「立花家史料館所蔵史料」（柳川古文書館寄託）と都城島津邸所蔵「都城島津家文書」について、それぞれ約三、六〇〇点と約四、五〇〇点のカラーデジタル撮影データを公開した。また、二〇二四年五月、京都府立京都大学・歴史館が編纂する『東寺百合文書』をフルテキスト化し、古文書フルテキストデータベースにて既刊の一五巻分すべてを公開した。さらに、二〇二四年九月に人文科学データシンポジウム「人文科学研究データに関する提供と利用のギャップ」を、二〇二五年一月にはデータインフラ強化事業の年次報告を兼ねたフォーラムを、それぞれ開催した。

八月には新たなデータベースとして「南北朝遺文フルテキストデータベース」を公開した（データベース担当者堀川康史准教授）。これには『南北朝遺文』（東京堂出版刊）の既刊分全三二冊に収録された全史料二〇三五六点の目録・本文データが搭載されている。

また、文部科学省「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」のユースケース創出課題として「異分野共創による史料学DXの確立」（代表者尾上陽介教授）および「Archivematicaを用いた人文科学データのキュレーションプロセスの自動化に関する試み」（代表者中村覚助教）が採択され、二〇二三年度より二年間の予定で実施している。前者は史料情報資源化ミニユニットが、データ科学・データ駆動科学による形態的料紙データ分析をユースケースとして、実践可能な史料学DXのモデルを提示することを目的としている。後者は歴史知識高度利用化ユニットが担当し、研究データの長期的な利活用支援のため、長期保存を支援するソフトウェアArchivematicaを用いた人文科学データのキュレーションプロセスの自動化に取り組んでいる。一〇月には国立情報学研究所において、研究データエコシステム構築事業シン

ボジウム二〇二四が行われ、本研究の進捗および成果について報告した。

四月からは、人間文化研究機構が進めるDH（デジタル・ヒューマニティーズ）組織ネットワーク協議会へ参加した。本協議会は、DHに関係する機関・組織が諸課題について情報を共有し議論する場であり、研究者単位ではなく機関・組織単位での参画とし、日本におけるDH活動の持続可能・強化を目的としている。七月二十五日には国立民族学博物館にて開催された二〇二四年度第一回本協議会へ参加した。

このほか、データ駆動型PJに関連する以下の二件の研究を開始している。一つ目は二〇二三年一〇月より開始したサントリーホールディングス株式会社との共同研究「時空間を越えたコミュニケーションに関する研究」である。この共同研究は、織田信長を対象に、相手と同じ空間にいるように対話し、酔っている状態をバーチャルに再現し、飲み会のように高揚した対話をバーチャルに実現し、織田信長のバーチャルな人格を作り上げ、対話する研究を行うものである。研究目的を実現していくため、本所では、史料編纂所データベースから織田信長に関わるデータを提供していくためのAPI（Application Programming Interface）を構築し、さらにそれ以外の研究資源からのデータ提供についても取り組んでいる（所内担当者金子拓教授）。

もう一つは、JSPS科研費基盤研究(S)「史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立」(研究代表者山田太造准教授、実施期間二〇二四―二〇二八年度)である。本科研は、日本列島に関わる史料を時代横断・地域横断の観点で分析可能なデータとして蓄積・管理・共有し、過去から現在を、多々の分野をシームレスにつなぐデータインフラストラクチャーとして成長させる日本列島記憶継承モデルの確立を目指している。これらの研究においては、AI・OCRを活用した史料・史料集(刊本)のテキストデータ作成・提供や異分野研究融合などに取り組んでいくことを予定している。

【共同利用・共同研究拠点の活動】

史料編纂所は、二〇一〇年に文部科学大臣より「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」として認定され、共同利用・共同研究拠点としての活動を開始している。この研究拠点は、研究資源とその利用手段の充実により日

本史研究の発展を願う研究者コミュニティの要望にこたえ、これまで蓄積してきた研究資源に加え、国内外に存在する日本関係史料について、国内外の研究者と共同調査・共同研究を行い、全体的・系統的な研究資源の蓄積と共同利用を促進し、史料学研究・日本史研究の質の向上をめざすことを目的としている。

この目的を達するため、特定共同研究と一般共同研究の二つの枠組みを設け、研究活動を実施している。特定共同研究は、古代史料・中世史料・近世史料・海外史料・複合史料の五つの領域でそれぞれ設定した課題について、共同研究者を公募するものであり、一般共同研究は、所外の研究者に課題と共同研究者を公募するものである。特定・一般それぞれの研究課題は、学外委員が過半数を占める東京大学史料編纂所協議会において、審査基準に則った評価をもとに審議の上、承認・採択されている。二〇二四年度は、四八名の所外研究者の参加による五件の特定共同研究課題と、のべ一三〇名の所外研究者とのべ七六名の所内研究者の参加による二五件の一般共同研究課題を遂行した。

今年度に公表された共同研究課題に関する研究成果としては、大東敬典著『Sugar and the Indian Ocean World: Trade and Consumption in the Eighteenth-Century Persian Gulf』(ブルームズベリー出版、二〇二四年八月)、顧明源編『比較社会文化叢書四八 対馬西山寺文書の研究』(花書院、二〇二五年三月)、賀茂別雷神社史料別編 氏人花押(賀茂別雷神社、二〇二四年一月)が刊行され、各種媒体により研究論文等が刊行・活字化された。このほか『東京大学史料編纂所研究成果報告』シリーズとして三冊の研究報告書がまとめられた。また、国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地(五)」(於京都府立京都学・歴史館、オンラインとのハイブリッド開催、二〇二四年六月一日)、同「砂糖、ワイン、ジャワイ文書…一七―一九世紀、文化的風景の変容」(於東京大学伊藤国際学術研究センター、オンラインとのハイブリッド開催、二〇二四年一月九日)、研究集会「京都大工頭中井家と江戸幕府・朝廷」(於京都府立京都学・歴史館、二〇二四年二月七日)、シンポジウム「地域史のなかの霊場 熊野と吉野」(於元興寺文化財研究所総合文化財センター、二〇二五年一月二六日)を開催したほ

か、展覧会「画鬼 河鍋曉斎×鬼才 松浦武四郎―『地獄極楽めぐり図』からリアル武四郎涅槃図まで」（静嘉堂文庫美術館、二〇二四年四月一三日～六月九日）、「松尾大社展 みやこの西の守護神」（京都文化博物館特別展、二〇二四年四月二七日～六月二三日）、「松尾大社 みやこの西の守護神」（鳥取市歴史博物館特別展、二〇二四年七月二〇日～九月一六日）、「泉涌寺における天皇家の葬送儀礼」（泉涌寺宝物館心照殿、二〇二四年七月三〇日～一〇月二七日）、「日米和親条約一七〇周年記念特別展 外国奉行と神奈川奉行―幕末の外務省と開港都市―」（横浜開港資料館、Part1「外国奉行 幕末の外務省」二〇二四年九月二日～一〇月二〇日、Part2「神奈川奉行 開港都市を治める」二〇二四年一〇月二六日～一二月二四日）、「泉涌寺山内と武家」（泉涌寺宝物館心照殿二〇二四年一〇月二九日～二〇二五年一月二六日）、「慶珊寺と富岡八幡宮の名宝―『大般若経』が語る中世東国史―」（神奈川県立金沢文庫、二〇二五年二月七日～三月三日）等の展示に協力をした。そのほかにも、研究会での口頭報告、講演、講座をはじめ、様々な形で研究成果の発信、公開、学界・社会への還元を進めている。なお、共同研究を通じて得られた史料の目録・画像については、図書閲覧室や史料編纂所のデータベースを通して利用できるようにしている。成果の全体については、本誌「共同利用・共同研究拠点による研究・成果」項に掲載している。

【国際交流と史料蒐集活動】

史料編纂所では早くから海外所在の日本関係史料に注目し、日本学士院・国際学士院連合（UAI）などの支援を得て、調査・収集を行ってきた。日本学士院は一九一九年に国際学士院連合に加盟し、共同研究活動に参画しているが、その代表的なものが一九二二年から始まった海外における未刊行日本関係史料の調査事業である。本所は一九五四年から、その一環である「在外未刊日本関係史料の複本作成事業」を委嘱されている。

また、共同利用・共同研究拠点の特定共同研究には海外史料領域が含まれ、二〇二二年度からは「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」が始まり、二〇二四年一月には国際研究集会「砂糖、ワイン、ジャワイ文書・一七～一九世紀、文化的風景の変容」を主催した。一般共同研究

においても「古代・中世法制史料の英訳とグロッサリー研究」が採択されている。日本史研究の国際化の基盤整備を積極的に進めている点は、拠点の第四期中期目標期間における中間評価でも高く評価された。

近年では欧米での調査に加え、東アジア諸国やロシアの関係機関との交流も深め、これらの国々における調査・収集にも取り組んでおり、二〇二四年七月には韓国の東国大学校文化学院との研究協定を更新した。また、日本・中国・韓国を代表する歴史研究編纂機関の友好協力関係の基盤を形成するために「東アジア史料研究編纂機関協議会」を設け、理事機関として参加し、定期的に国際学術会議を開催している。コロナ禍によって、二〇二〇年度に実施予定であった国際学術会議が延期となり、二〇二二年一月によりやうくオンライン開催（韓国国史編纂委員会主催）となるなどの困難はあったが、今回は二〇二五年度に史料編纂所主催により久々に対面で開催する予定で、その準備を進めている。

【特定事業費・学内連繋研究機構等による大型プロジェクト】

一 天皇家・公家文庫プロジェクト

一九九八年度より継続的に採択されてきた大型科学研究費などを承け、二〇二〇～二四年度は概算要求事項「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業に大学運営費より配分があり、天皇家・公家文庫収蔵史料の調査研究およびデジタル画像の蒐集公開を遂行した。画像公開は、本所データベースのENCARTAから、所蔵機関との取り決めにより、インターネット公開と本所閲覧室での公開、また関係機関への画像提供によるインターネット公開や訪問利用となっている。公開にあたっては、目録情報との付与に努めてきた。

本年度は、宮内庁書陵部所蔵の柳原家本・中井家文書（寛政度）京都御所造営関係文書・近世公家日記・九条家本『北山抄』ほか典籍、また陵墓石塔実測図、西尾市岩瀬文庫と京都府立京都学・歴史館所蔵の柳原家本の史料画像を追加してWEB公開した。これで柳原家旧蔵本の主要部分が揃い（歴彩館分は一部）、横断的な閲覧が可能となり、蔵書の復元研究の基盤が整った。京都御所東山御文庫については、『皇室の至宝』（毎日新聞社）のために撮

影した貴重なカラーフィルムのスキャンデータを閲覧室にて公開開始した。本年度も書陵部本（近世公家日記、壬生家本『続左丞抄』など）のデジタル画像による蒐集を進めており、準備が整い次第、追って公開予定である。これまでにデジタルデータで蒐集した画像は累計約一三四万コマ（東山御文庫本、宮内庁書陵部本、陽明文庫本、岩瀬文庫本）で、うちWEB公開も約八万コマ（書陵部本、岩瀬文庫本）となり、本所・本学および京都府立京都学・歴史館等の他機関や門跡寺院等の関係史料を加えた蒐集画像は一四〇万コマ以上に及んだ。

研究成果公開としては、全体の取りまとめの報告会として研究集会「禁裏・公家文庫研究の現段階」（二〇二五年三月二日、オンライン）を開催した。プロジェクトの今期の柱の一つとしては、異分野融合による御所・宮殿の総合的な研究があり、東京大学大学院工学系研究科・海野聡氏との連携のもと、中井家文書を核とした建築史学との協業を進めており、国際研究集会「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵『中井家文書』からみる造営現場の実態」（京都府立京都学・歴史館、二〇二四年六月一六日）、シンポジウム「前期難波宮・藤原宮の儀礼と空間構成」（大阪歴史博物館、二〇二四年一月一七日）を開催し、シンポジウム「京都大工頭中井家と江戸幕府・朝廷」（京都府立京都学・歴史館、二〇二四年二月七日）にも協力した。金鶏会館（県立長野高校同窓会館）での市民向け公開講座も九回開催した。また『陽明文庫講座図録』六や、奈良県立橿原考古学研究所などとの共編で『飛鳥宮の儀礼と空間構成』（八木書店）を刊行し、『新訂増補日本古代人名辞典』三冊（吉川弘文館）も二〇二五年度より刊行開始の見込みである。

比較的大規模の大きな資金によるプロジェクトとしては本年度にて終了するが、特に京都御所東山御文庫・宮内庁書陵部・陽明文庫など大規模史料群の調査および画像蒐集は、本所固有の研究課題として継続的に取り組むべきものであり、古典籍の画像公開をめぐる状況が大きく変化するなか、作業内容面での力点を見直すとともに、安定的な人員と財源の確保が必要である。

二 地震火山史料プロジェクト

史料編纂所では、現在、地震研究所と連携して前近代の地震火山史料を研究するプロジェクトを二件実施している。一つは、地震・火山噴火予知研究

協議会史料・考古部会の研究課題「史料による近代以前の地震・火山活動の調査・分析とその公開」で、「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」（二〇一四～二〇一八年度）「地震火山関連史料の収集・分析とデータベースの構築・公開」（二〇一九～二〇二三年度）に続き、進めているものである。これは、既刊の地震史料集の全文テキストデータベース化を進める取り組みで、二〇二二年度に『増訂大日本地震史料』『新取日本地震史料』全冊のテキスト化が完了し、「地震史料集テキストデータベース」として一般公開を開始した。引き続き既刊史料集掲載史料を史料原文と対照させて校訂を進めることが必要であり、本年度もその課題に取り組んでいる。また、全文テキスト中の地名を自動的に抽出するための検討を行った。まだ試験段階であるが、自動抽出の精度を高め、地震を感じた場所に位置情報を付与し、地図上に表示できるようにしていく計画である。

もう一つは、史料編纂所と地震研究所が連携して前近代の地震火山史料研究を行うために、二〇一七年度より学内に設置した地震火山史料連携研究機構（設置期間七年間）における取り組みである。本機構は二〇二三年度末に設置期限を迎えたが、本年度から一〇年間の再設置が認められた。ここでは、既刊・未刊を問わず、日本国内の諸地域における有感地震記録を定点観測的に収集する研究プロジェクトを進めている。特に、一九世紀の日記史料から有感地震記事を収集し、データベース化する取り組みを行っている。本年度は、既刊史料集や史料編纂所架蔵史料からの採録のほか、宮城県仙台市、奈良県吉野町、愛媛県宇和島市・西条市、大分県佐伯市、熊本県熊本市、福岡県柳川市などでの史料調査を行った。また、地震研究所の教員と連携して、教養学部で文系・理系の学生を対象に学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講した（履修者二三四名）。

三 連携研究機構ヒューマニティーズセンター等におけるプロジェクト

連携研究機構ヒューマニティーズセンターは、人文学の振興を目指して二〇一七年七月設置され、二〇二二年度からは人文社会系研究科を主管部局として企画・運営体制を強化する体制となり、史料編纂所も継続的に連携部局として参加・協力している。

このほか外部経費等を得た多くのプロジェクト研究が行われている。今年

度は、研究所の研究成果報告書シリーズとして、史料目録・史料翻刻等を含め、計一二点が刊行されている。

【貴重史料の調査・研究と保全事業】

史料編纂所は多くの貴重史料（国宝一件、重要文化財二〇件を含む原本史料二〇万点など）を所蔵しており、その適切な保存管理は重要な課題である。これらの貴重史料については、予算確保に努めて修理を実施するとともに、解体等の際にのみ可能となる調査・研究を継続している。二〇二四年度には以下の事業を行なった。

①二〇二〇年度より「『原本史料情報解析』の方法による南九州関係文書の保存と研究」プロジェクトとして、鹿児島を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を推進している。史料保存技術室では、『入来院文書』の修理を継続しており、二〇二四年度には五巻（文書九二点）の解体修理と料紙データの採取を行なった。あわせて、西国の武家文書について、二〇二二年度に開始した『湯原家文書』（二一九点）の修理を完了させるとともに、『益田家文書』の修理を開始し、五巻（文書九四点）の解体修理と料紙データの採取を行なった。これにより、従来正文と判断されてきた文書のなかに少なからず写の存在していることが明らかになった。また、二〇二二年度より国の国宝重要文化財保存・活用事業費補助金の交付を受け、国宝『島津家文書』の修理事業を進めている。その過程で、同家文書の白眉とされる手鑑『歴代亀鑑』について、文書を貼付する台紙の中に五〇点以上の文書が存在することが明らかになるなど、新たな知見を得つつある。

②画像史料解析センターのプロジェクトの一環として、所蔵するガラス乾板の保全（クリーニング・状態調書の作成）・養生（包材・保存箱への収納）を、当該技術をもつ民間業者の協力を得て内製化するとともに、破損度の高いものについては業者に依頼して作業を進めた。

③二〇二四年一〇月より図書閲覧室の事前予約を不要とし、感染症対策のための利用制限を解除したが、この間に強く認識されるに至った史料のデジタル化推進の重要性はいよいよ高まっている。今年度も東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、特殊寛書『島津家本』のデジタル化を進め、

一四九点を撮影した。これらの高精細貴重書史料画像は、「所蔵史料目録データベース」などを通じてWEB公開を進めている。なお、二〇二四年度よりWEBで新規公開した史料画像のリストを月毎にホームページのニュース欄に掲出することとした。

これらの活動は、「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有化」として東京大学UTokyo Compass推進会議のSDGs（持続可能な開発目標）プロジェクトの登録事業となっている。教員とともに、修補・撮影等を専門とする史料保存技術室の職員が積極的にかかわり、大きく貢献している。さらに史料の管理・保全全般を担う図書部も、史料の整理・登録や画像公開・史料利用者への対応・書庫の環境整備などに尽力している。

【未来社会協創推進本部プロジェクト】

二〇一五年に国連総会で採択されたSDGsを、指定国立大学の課題として、東京大学に設置された未来社会協創推進本部のもとで取り組んでいる。史料編纂所では、「日本各地域の文化資源保全と地域アイデンティティ構築への貢献」「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有化」「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」の三件のプロジェクトを登録して活動している。

【社会連携・公開・発信】

史料編纂所の史料調査・収集事業は、上述の外部資金によるプロジェクトや共同利用・共同研究拠点のプロジェクトを通じて、地域の博物館・資料館や地方公共団体の関係機関と連携した取り組みとなっている。横浜開港資料館とはHCCAT Plusによる史料画像の連携公開を進めており、イギリス国立公文書館・フランス外交文書館が所蔵する日本関係史料データについて公開している。また、データインフラ強化事業により、立花家史料館所蔵「立花家史料館所蔵史料」（柳川古文書館寄託）と都城島津邸所蔵「都城島津家文書」については、それぞれ約三、六〇〇点と約四、五〇〇点の史料画像をHCCAT Plusから公開し、また京都府立京都大学・歴史館編纂『東寺百合文書』については、既刊の一五巻分すべてをフルテキスト化して古文書フルテキストデータベースから公開した。

市民への公開・発信という面では、所内のさまざまなプロジェクトによる取り組みのほか、二〇一六年以来、本所の企画により文京アカデミア講座（文京アカデミア主催、史料編纂所協力講座）を継続して開講してきた。二〇二四年度は、前期（六月）は「日本史のなかの戦争」、後期（一〇―十一月）は「史料にみる王朝文化と貴族社会」というテーマで、各五回を実施した。実施後のアンケートによれば、受講生の満足度は一貫して高い水準にあり、個別の感想も高評価である。これに加え、名古屋・栄中日文化センターで五回の協力講座、秋田県生涯学習センター主催のあきたスマートカレッジでも五回の協力講座を実施した。

【教育への参画、学部・大学院教育】

史料編纂所の教員は、本学の人文社会系研究科（日本史学、文化資源学）や大学院情報学環・学際情報学府における大学院教育に参加している。また全学自由研究ゼミナールなど、教養学部の学部教育にも携わっている。あわせて、日本史の研究についてのRA制度を設けて本学院生への研究支援を行っている。また多くの教員は、学外の国公私立大学で非常勤講師を兼務するなど、幅広く大学の日本史教育に従事している。さらに、日本学術振興会の特別研究員の受入れや、海外の若手研究者（DC院生等）を外国人研究員として受け入れるなど、内外の若手研究者育成に貢献している。

【教員評価、外部評価】

『東京大学史料編纂所報』は、当該年度の各種の研究活動を集約して、記録する役割を果たすだけでなく、研究所における研究活動状況を自ら点検・総括する自己評価活動の媒体としても機能するものと考えている。

個々の教員の評価は、教授任用から一〇年を経過した段階で、自己評価に加えて、所外委員による評価を行うほか、全教員を対象とした定期的な教員評価（教授・准教授・助教を三つのグループに分け、原則として三年で一巡）を行っている。二〇二四年度は、教授業績外部評価には該当者がなく、常勤教員一三名を対象として、定期的な教員評価を実施した。

古代史料部門

二〇二四年度は、第一室が『正倉院文書目録』十続々修五および『九世紀編年史料』（第一・二期）の、第二室が『大日本史料』第二編之三十三（長元六年正月）の、第三室が第三編之三十一（保安四年正月）の、第四・五室が第五編之三十八（建長四年正月）の、編纂をそれぞれ行った。

本部門所属教員（兼任教員も含む）が加わった（Ⅰ）所内プロジェクト研究は以下の通り。

（Ⅰ）データベース関係 代表者として担当しているものとして、「正倉院文書マルチ支援データベースSHOMUS」・「奈良時代古文書フルテキストデータベース」（第一室）、「編年史料（古代） 編纂支援資源化データベースMIDOH」（第一・二室）、「HICAT Plus（禁裏公家文庫）」（第三室）、「金石文拓本史料データベース」（菊地大樹）、「歴史絵引データベース」・「肖像情報データベース」・「肖像画模本データベース」（藤原重雄）、「南北朝遺文フルテキストデータベース」・「日本史用語翻訳グロッサリーデータベース」（堀川康史）がある。また科学研究費・研究成果公開促進費（データベース）「大日本史料総合データベース（平安時代・全文）」（代表者・新井重行）により、「大日本史料」第二編第十六―十九冊の全文テキストを生成・登録・公開した。これにより『大日本史料』第一編第一―十九冊の全文データが日本史料総合DB及びMIDOHから一般公開となった。

（Ⅱ）共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」の研究課題 ①特定共同研究では、「古代史料領域」「史料編纂所」「正倉院文書調査関係資料」の整理と研究資源化（代表者・稲田奈津子、所内共同研究者・新井・黒須友里江・小塩慶）、「複合史料領域」「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」（所内共同研究者・藤原）を担当した。また、「奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究――小川八幡神社大般若経を核として」（二〇二二―二三年度）の成果として、『小川八幡神社大般若経調査概報 二〇二二―二〇二三 各論篇』（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四―四、二〇二五年三月）を刊行し、全巻の

撮影画像のWeb公開を開始（二〇二五年二月五日）した。②一般共同研究については別項を参照。

（3）画像史料解析センター研究プロジェクト 代表者として担当したプロジェクトとして、「宮廷調度品の画像史料研究プロジェクト」（新井）、「日本荘園絵図聚影」中世釈文編整理プロジェクト・「歴史図像学研究プロジェクト」（藤原）、「金石文拓本文史料の整理と公開」（菊地）、「今川了俊花押の収集と編年研究」（堀川）がある。

（4）概算要求事項（事業費）「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業（第三室）二〇二〇―二四年度の五年度目。蒐集したデジタル画像のうち、宮内庁書陵部所蔵柳原家本・内匠寮本「中井家文書」等のデジタル画像をHi-CAT PlusからWeb公開した（二〇二四年四月より）。また同じく、宮内庁書陵部所蔵の近世公家日記等、西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本のWeb公開の準備を整えた。最終年度にあたり、研究集会「禁裏・公家文庫研究の現段階」（二〇二五年三月一二日、オンライン）を開催した。刊行物として、田島公・海野聡・鶴見泰寿編『飛鳥宮の儀礼と空間構成』（八木書店）、田島公『日本、中国・朝鮮対外交流史年表』（汲古書院）、『陽明文庫講座図録』六、『国際研究集会「御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集』五、『シンポジウム「前期難波宮・藤原宮の儀礼と空間構成」報告集』がある。

（5）その他『正倉院文書目録』編纂のための調査等を、部門教員等が加わった「正倉院文書」プロジェクト（第一室）として実施している。

部門教員が加わった（Ⅱ）所外プロジェクト研究は以下の通り。

（Ⅰ）科学研究費のうち部門教員が研究代表者となった研究課題 基盤研究（C）「東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―」（代表者・稲田）・若手研究「平安時代後期政治構造の史料学的研究」（代表者・黒須）・若手研究「今川了俊関係史料の分析による室町幕府地方支配の研究」（代表者・堀川）、研究活動スタート支援「律令国家成立期における軍事体制の特質とその形成の意義」（代表者・古田一史）。

（Ⅱ）受託研究費 福岡市史編纂委員会「福岡市域に関わる史料の調査及び研究」（稲田）。

上記編纂・研究活動に伴い部門教員が中心となって継続している史料採訪では、京都御所東山御文庫史料、宮内庁正倉院事務所正倉院文書、公益財団法人陽明文庫近衛家伝来史料等の調査があり、デジタル画像の蒐集・公開に関する活動では、蒐集した京都御所東山御文庫禁裏本・同別置本のデジタル画像の閲覧室情報端末での公開準備がある。以上、詳細については関係の各項目を併せて参照されたい。

中世史料部門

二〇二四年度は中世史料部門の担当書目での刊行はなく、各室においては、担当史料集の次年度以後の刊行準備を進めた。

共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」の活動では、特定共同研究の中世史料領域「賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究」に代表者として一名、所内共同研究員として一名、複合史料領域「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」に所内共同研究者として三名、それぞれ部門員が参加した。

また一般共同研究では、「史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」に二名、「智感版大般若経の研究資源化を通じた中世後期東国宗教文化の研究―慶瑞寺本を中心に―」に二名、「近江国惣村文書を対象とした横断的原本研究の試み」に一名、「古代・中世法制史料の英訳とグロッサリー研究」に一名、「東日本の中近世文書の形態・料紙に関する科学研究」に一名、「中世神道資料を中心とした高野山子院伝来資料の研究資源化」に一名、「吉野地域中世史料の調査と研究資源化」に一名、「対馬の外交僧による日朝通交システム関係文書の基礎研究」に二名、「近世琉球における文書料紙の科学研究」に一名、「小値賀町善福寺所蔵大般若経ならびに関連史料の調査・研究」に一名、「萩原寺所蔵地藏院聖教調査の成果の共有化」に二名、「勝尾寺文書の全体像の解明および研究資源化」に二名、「益田家伝来品の伝来・伝世に関する文書の調査研究」に一名、「AI技術を用いた像内納入文書の研究資源化および史料学的研究」に一名、それぞれ部門員が所内共同研究者として参加した。

史料探訪、科学研究費等による研究、所内研究プロジェクト等についても、本年度も多くの部門員がそれぞれの立場で参加した。件数も人数も多く、これらについては「史料探訪」「史料研究・成果公開」「所員研究活動」の各項に報告があるので、そちらを参照していただきたい。

近世史料部門

二〇二四年度の各室の編纂・出版活動等は以下の通りであった。近世第一室・『大日本史料』第十二編之六十四出版準備／近世第二室・『大日本近世史料 細川家史料』二十九出版／近世第三室・『大日本近世史料 市中取締類集』三十三出版／近世第四室・『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記』十六出版準備・『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之八』出版／維新第一室・『大日本維新史料 類纂之部 松平昭休往復書翰留』二出版準備／維新第二室・『大日本古文書 幕末外国関係文書』五十五出版準備。

地震・火山史料プロジェクトを続け、東京大学地震火山史料連携研究機構に兼務教員四名を出し、史料調査・研究、教養学部での教育などを進めた。各自が参加した調査については、「史料探訪」の項も参照願いたい。

共同利用・共同研究拠点（文部科学大臣認定「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」）特定共同研究、近世史料領域課題「近世大名家臣家史料の「読み直し」と研究資源化」（研究代表者：小宮木代良、二〇二二—二〇二四年度）を進め、二〇二三年一月一日佐賀市内で開催したシンポジウム報告書「坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀藩と江戸幕府」冊子版を発行した（佐賀県立図書館、二〇二四年一月）。

教員等が研究代表者となり、科学研究費補助金を得て進めた研究には、以下がある。若手研究「日本近世における政教関係の形成と確立」（研究代表者：林晃弘）二〇二二—二〇二四年度、基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」（研究代表者：杉本史子）〇東洋文庫研究員、もと近世史料部門教授）二〇二二—二〇二四年度、基盤研究(C)「徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く」（研究代表者：及川亘）二〇二二—二〇二四年度、基盤研

究(C)「預人の政治史的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究」（研究代表者：荒木裕行）二〇二二—二〇二四年度、基盤研究(B)「近世書状史料群の研究と歴史情報資源化」（研究代表者：松澤克行）二〇二二—二〇二五年度、基盤研究(C)「近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化」（研究代表者：小宮木代良）二〇二三—二〇二五年度、基盤研究(B)「幕末維新时期史料研究の学術資源化推進と国際共有基盤の新展開」（研究代表者：小野将）二〇二四—二〇二六年度、基盤研究(B)「東アジア歴史資料の学術資源化と保全に関する国際交流の推進研究」（研究代表者：杉森玲子）二〇二四—二〇二六年度、基盤研究(B)「維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化」（研究代表者：箱石大）二〇二三—二〇二七年度。また、部門独自の社会連携活動として、公益財団法人徳川記念財団が主催する古文書講座に講師を派遣し協力した。

他にも研究所や学内外の多種多様な研究プロジェクトに部門教員が参加している。本「所報」各項のほか、「東京大学史料編纂所研究紀要」、「東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信」、東京大学および東京大学史料編纂所ウェブサイトで掲載記事等も併せて参照願いたい。

古文書・古記録部門

二〇二四年度、古文書室では四書目（東寺百合文書・大徳寺文書別集徳禪寺文書・東大寺文書・醍醐寺文書）、古記録室では四書目（中右記・平記・実躬卿記・後法興院閼白記）の編纂を行った。また、古文書室では『大日本古文書 家わけ第十九 醍醐寺文書之十八』を、古記録室では『大日本古記録 後法興院閼白記 一』を刊行した。出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。

編纂各書目については、原史料の詳細な観察によって定本的テキストを作成する、あるいは様々な種類の写本を比較検討し、より良質で完成度の高い原形態の復元を果たすという方針のもとに、史料調査・探訪などを行った。主な調査先は、京都府立京都学・歴史館、大徳寺塔頭徳禪寺、東大寺図書館、醍醐寺、西大寺、陽明文庫、国立歴史民俗博物館、杏雨書屋、宮内庁書陵部、

国立公文書館、尊経閣文庫などであった。

部門構成員は、各人の研究・編纂との関連にに応じて研究プロジェクトを組織し、参加している。科学研究費補助金による研究で、当部門構成員が代表者として統轄しているおもな共同研究には、「荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究」（基盤研究(A)、代表者井上聡、二〇二二―二〇二六年度）がある。各研究は、それぞれの課題とする史料の研究資源化をはかりながら、あらたな歴史叙述を模索しての研究を進めている。

当部門と密接に関わるデータベースに、古文書フルテキストデータベースと、古記録フルテキストデータベースがある。古記録フルテキストでは、『景南和尚語録』のデータ作成・公開を行った。

その他の諸活動については、「史料研究・成果公開」「所員研究活動」の各項を参照されたい。

特殊史料部門

特殊史料第一室は、兼任室員のもとで次期『花押かがみ』編纂に関する準備作業を行っている。編年各室で作成された「花押彙纂」のデータベース化については、前年度までに引き続き、画像史料解析センターの「花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト」に参加して行っている。なお、同プロジェクトの遂行には、科学研究費基盤研究(A)「筆跡・花押情報の高精度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による」(研究代表者末柄豊氏)および奨学寄附金(故・林譲氏)からの支援を受けた。

海外史料第一室は、『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原譯文編之六を刊行した。特定共同研究(海外史料領域 代表者松方冬子)「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」においてフランス高等実習院からドゥジャニラ・コウト名誉教授を招聘し、アジア史関係のポルトガル史料の活用についてセミナーを開催した(二〇二五年三月二八日)

海外史料第二室は、『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』原文編之十四の出版準備を行った。また、同書のオンライン公開に向けて、日本学士

院に状況と方針を報告し、東京大学出版会とのすり合わせを続けた。併せて、既刊分オンライン公開の準備として、既刊前付・索引と奥付のPDFを作成し(学術専門職員久礼克季による)、本文のPDFと連結した(作成したデータは情報支援室に提供した)。所内では、研究企画委員会に、既刊分オンライン公開、新刊分のオンデマンド版作成について諮るとともに、以上の協議と作業の経過を年度末研究者集会で報告した。さらに、将来の編纂・出版の準備のため、オランダ商館長日記の原本校訂作業を進め、一六六一年、一六六二年度分を完了した(久礼克季による)。

なお、日本学士院UAI関連事業「在外未刊行日本関係史料」の一環として、二〇二四年九月、アメリカ合衆国に後藤敦史氏を、二〇二五年二―三月オランダに大東敬典を派遣した。それぞれ、アメリカ議会図書館における海軍アジア艦隊の司令官関連文書の調査、オランダ東インド会社のアジア外交に関する史料の調査を行った。

中世禅籍史料研究プロジェクトでは、本所所蔵「天塚和尚語録」および「春林宗俣和尚等法語」の電子テキスト化を進め、テキスト構造化の国際標準に準拠したデータを作成した。これをアプリケーションを介してHTML化し、本所ホームページのデジタルギャラリーにて全文を公開した。

画像史料解析センター

1 構成

二〇二四年度のセンタースタッフは、第一分野(絵画史料)が箱石大教授(センター長)、林晃弘准教授、堀川康史准教授、第二分野(画像史料)が菊地大樹教授、岡本真准教授、第三分野(古文書画像)が荒木裕行准教授、井上聡准教授の七名であった。また、佐藤重聖氏(滋賀県立大学)に客員教授を委嘱した。

佐藤 重聖(滋賀県立大学)

職務内容 日本史に関する各種画像史料の解析・研究に対する助言・支援

期 間 二四・四・一―二五・三・三一

運営委員会は、上記のセンタースタッフ六名に、黒嶋敏教授（運営委員長）、新井重行准教授、小塩慶助教、立石了助教の四名を加えた、二名で構成した。

2 研究プロジェクト

二〇二四年度は、下記の一八件のプロジェクトを立ち上げ、研究を行った。各プロジェクトのメンバーと活動の概要は以下の通りである。

【第一分野（絵画史料）】

①宮廷調度品の画像史料研究プロジェクト

〔メンバー〕 新井重行（代表者） 藤井恵介（共同研究員、本学名誉教授）
〔活動の内容〕 内庁書陵部所蔵『公事録』『公事録付図』の画像（約九三〇〇コマ）を収集し検討・整理／「歴史絵引データベース」のリンク切れ箇所について確認・調整

②長篠合戦図屏風プロジェクト―長篠合戦図屏風模写のための近世狩野派絵画および合戦図屏風の比較研究―

〔メンバー〕 金子拓（代表者） 黒嶋敏 須田牧子 村岡ゆかり 白水正（共同研究員、犬山城白帝文庫） 津田卓子（同、名古屋博物館） 原史彦（同、名古屋城調査研究センター） 阪野智啓（同、愛知県立芸術大学） 藤本正行（同） 三宅秀和（同、群馬県立女子大学）
〔活動の内容〕 本所史料保存技術室で進行中の模写についての意見交換／長篠合戦図屏風各本に関する研究

③島津領国絵図プロジェクト

〔メンバー〕 黒嶋敏（代表者） 須田牧子 畑山周平 渡辺美季（共同研究員、本学大学院総合文化研究科）
〔活動の内容〕 本所所蔵「島津領国絵図」のデジタル化と公開準備

④「荘園絵図聚影」中世釈文編整理プロジェクト

〔メンバー〕 藤原重雄（代表者） 榎原雅治（共同研究員、本学名誉教授） 高橋敏子（同、本所元教授）
〔活動の内容〕 『日本荘園絵図聚影』釈文編中世三の編纂資料を整理し、釈文や参考文献の修正情報を集約

⑤歴史図像学プロジェクト

〔メンバー〕 藤原重雄（代表者） 松澤克行 太田まり子（学術専門職員） 高岸輝（共同研究員、本学大学院人文社会学系研究科）

〔活動の内容〕 法雲院所蔵の烏丸家肖像画の追加調査／歴史絵引データベースにキャプション検索用データを新規作成・登録

⑥近世都市図解析プロジェクト

〔メンバー〕 山口和夫（代表者） 及川亘 藤原重雄 杉森哲也（共同研究員、放送大学） 西山剛（同、京都府京都文化博物館）

〔活動の内容〕 「洛中洛外絵図」・「行幸図」関連史料の所在情報の集約および調査／成果発信は『藝能史研究』二四六号にて西山・藤原が論文発表など

【第二分野（画像史料）】

①近世・近代摺物画像プロジェクト

〔メンバー〕 荒木裕行（代表者） 吉田ますみ（共同研究員、三井文庫）
〔活動の内容〕 三井文庫所蔵近世・近代摺物のデジタル撮影

②古写真研究プロジェクト―高精細デジタル画像解析を基軸とした幕末明治初期写真史料の研究資源化推進プロジェクト―

〔メンバー〕 箱石大（代表者） 菊地智博 桑田恵里 高山さやか 谷昭佳 遠藤楽子（共同研究員、東京国立博物館） 高橋則英（同、日本大学）
〔活動の内容〕 東京大学明治新聞雑誌文庫にて大正期写真雑誌調査／鹿児島県下所在古写真調査／海の見える杜美術館にて中嶋待乳関係古写真調査・保全作業／鳥取市所在古写真関係資料調査／日本の写真遺産と芸術遺産の研究のための新デジタルツール（主催：フランス国立ギメ東洋美術）にて谷昭佳が報告／福井県立若狭歴史博物館にて井田家旧蔵の古写真調査

／小値賀町歴史民俗資料館にて同館所蔵ガラス乾板調査・保全作業／ワークショップ「写真の技法識別と取り扱い・保存」を開催／鳥取市所在古写真調査／柏原美術館所蔵古写真、岩国徴古館所蔵古写真の調査／鍋島報效会徴古館所蔵古写真コレクションの調査／『木村喜毅関係古写真資料の調査と研究』東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四一七、二〇二五年三月／『中嶋待乳関係古写真資料の調査と研究』東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四一八、二〇二五年三月／谷昭佳「下関戦争アンブプロタイプ写真帖とその周辺」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』

一〇四号、二〇二四年五月

③ 戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト—西南戦争錦絵の学術資源化研究—

〔メンバー〕 箱石大（代表者） 中村寛 山田太造

〔活動の内容〕 海の見える杜美術館所蔵の西南戦争錦絵公開の準備／箱石大「新発田藩翻刻『京都府下人民告諭大意』の板木」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇六号、二〇二五年一月

【第三分野（古文書画像）】

① 電子くずし字字典データベース開発プロジェクト

〔メンバー〕 井上聡（代表者） 新井重行 稲田奈津子 遠藤珠紀 小宮木代良 松澤克行 宮崎肇（特任研究員） 川上一（共同研究員、国文学研究資料館）

〔活動の内容〕 くずし字データの切り出しと「電子くずし字字典データベース」へのデータ登録（二八四五一件）／データベース中の所外史料データ表示機能の改修

② 本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト

〔メンバー〕 井上聡（代表者） 新井重行 桑田恵里 高山さやか 谷昭佳 箱石大 藤原重雄

〔活動の内容〕 ガラス乾板の保全とデータ作成／所外所在ガラス板写真の調査

③ 花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト

〔メンバー〕 川本慎自（代表者） 井上聡 宮崎肇（特任研究員） 戸谷穂高（共同研究員、日本大学非常勤講師）

〔活動の内容〕 「花押データベース」への花押カード・花押彙纂データ（三〇四九五件）ならびに新花押データ（三八八九件）の登録／花押カードデータを対象としたサムネイル画像の生成／奈良文化財研究所・滋賀大学データサイエンス学部などとの研究協力

④ 金石文拓本史料の整理と公開

〔メンバー〕 菊地大樹（代表者） 稲田奈津子 井上聡 金子拓 川本慎自 高橋慎一朗 藤原重雄 村山卓（共同研究員、埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

〔活動の内容〕 金石文データベースの公開準備／金石文史料の調査と拓本採集（宮城県石巻市・山梨県甲府市など）／『中世日本関係中国金石文』東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四—二、二〇二四年九月

⑤ 離島史料研究プロジェクト

〔メンバー〕 須田牧子（代表者） 井上聡 桑田恵里 谷昭佳

〔活動の内容〕 長崎県北松浦郡小値賀町善福寺所蔵大般若経の悉皆調査／小値賀町歴史民俗資料館寄託ガラス乾板史料の調査

⑥ 犬追物関係資料研究プロジェクト

〔メンバー〕 高橋慎一朗（代表者） 小瀬玄士 畑山周平 林晃弘
〔活動の内容〕 醍醐寺所蔵の武家故実関連史料の調査／鹿児島市尚古集成館・鹿児島市立美術館所蔵史料の調査・撮影

⑦ 中世花押の編年研究プロジェクト—今川了俊花押の収集と編年研究—

〔メンバー〕 堀川康史（代表者） 井上聡 西田友広 林遼

〔活動の内容〕 文書目録および関連史料の検討／堀川康史「今川了俊勘返田原氏能書状—豊後田原氏と筑後国竹野荘—」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇六号、二〇二五年一月

⑧ 禅宗史料画像研究プロジェクト

〔メンバー〕 岡本真（代表者） 金子拓 川本慎自 須田牧子 山家浩樹
〔活動の内容〕 大徳寺龍源院所蔵史料の調査・撮影／相国寺所蔵史料の調査／岡本真「中世後期の臨済宗法燈派と堺」『堺研究』四七、二〇二五年三月

⑨ 泉涌寺書画研究プロジェクト

〔メンバー〕 林晃弘（代表者） 小瀬玄士 高島晶彦 高橋慎一朗 宮崎肇
〔活動の内容〕 泉涌寺所蔵書画史料の調査／東京大学総合図書館所蔵史料の調査

3 研究集会・展示など

本センターおよび古写真真研究プロジェクトなどの共催として、ワークショップ「写真の技法 識別と取り扱い・保存」を二〇二四年八月五日（七）に本所で開催した。

また、二〇二二年度の琉球諸島図プロジェクトなどの研究成果を盛り込み、本所所蔵「海東諸国紀」と沖縄県立博物館・美術館所蔵「琉球国図」の連携操作を可能とした「一五世紀の日本図・琉球図デジタルアーカイブ」を二〇二五年三月より公開した。

4 センター通信

二〇二四年度は、次の三冊を発行した。

第一〇四号 二〇二四年五月発行 三二頁

新収史料「洞院公賢書状」の紹介（井上聡）ほか

第一〇五号 二〇二四年九月発行 三二頁

海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」二〇二四年六月調査報告（水上たかね）ほか

第一〇六号 二〇二五年一月発行 三六頁

細川忠利の花押の変遷（林晃弘）ほか

前近代日本史情報国際センター

本センターは、史料情報集約化ユニット・史料情報資源化ユニット・歴史知識高度利用化ユニットの三つのユニットを設けて歴史情報学研究を推進している。また二〇二〇年度より、史料情報資源化ユニットのもとに原本史料情報資源化ミニユニットを置いている。多様な課題に対応するため、ユニット間で連携し、また他の研究グループとの協業で研究を進めている。二〇二四年一〇月からは大月希望特任研究員がメンバーに加わっている。

1 JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業

本事業は、二〇二二年度末に終了したJSPS「人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」の成果等を踏まえ、人文科学・社会科学のデータ共有、利活用を促進するデータプラットフォーム等の基盤のさらなる充実・強化を図り、研究者がともにデータを共有しあい、国内外の共同研究等を促進することを目指すものである。二〇二三年九月に、本所は社会

科学研究所とともに、本事業を担う中核機関・東京大学として採択された（事業期間は二〇二三年一〇月～二〇二八年三月）。前事業に引き続き情報センターを中心として進めていく。本事業では、取組A…JDCat（国立情報学研究所〈NII〉が構築した人文科学・社会科学総合データカタログ）との連携、取組イ…他機関のデータ受入や受託、取組ウ…データ利活用の促進、取組エ…JDCatの運用・改修、メタデータスキーマや統制語彙の妥当性に係る継続的な検討等、取組オ…「データ共有のための手引き」の妥当性に係る継続的な検討等、取組カ…拠点機関との連携及び関係機関との調整、という六本の柱が設定されている。二〇二四年度は以下について取り組んだ。

・中核機関運営委員会の開催（毎月）…長期計画に関する持続的かつ円滑なコミュニケーションを維持し、事案の発生に対しても柔軟かつ迅速に対応するために、人文科学・社会科学が緊密な連携を組んで、管理能力を発揮する体制として整備・実施した。委員長は史料編纂所所長、副委員長は社会科学研究所所長。

・実務者ミーティングの開催（二〇二四年九月二十五日、二〇二五年二月一日）…中核機関、拠点機関等の実務担当者が出席し、JDCat連携にあたっての問題点の洗い出しやシステム改修の検討、「データ共有のための手引き」の妥当性にかかる検討など、各取組についての進捗報告や情報交換を行った。

・人文科学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「研究データの利活用と流通を強化する」の開催（二〇二五年一月三十一日）。

・人文科学データシンポジウム「人文科学研究データに関する提供と利用のギャップ」の開催（二〇二四年九月一八日）。

・「島津家本」のうち、画像のあるものについて、JDCatメタデータの整備を進め、これまでに六三九冊分のメタデータを登録した（二〇二四年十二月）。

・神奈川県立金沢文庫所蔵史料について、文化財指定外の史料を対象に四五五件分についてJDCatへ登録した（二〇二四年八月）。

・小川八幡神社所蔵「小川八幡神社大般若経」史料画像約二、八〇〇点について、小川八幡神社・小川八幡神社大般若経管理委員会・和歌山県立博

物館の協力により、HiCAT Plusを介してWeb公開した。

- ・立花家史料館および柳川古文書館の協力により、立花家史料館所蔵（柳川古文書館寄託）「旧柳河藩主立花家文書」「大友家文書」の史料画像約三、六〇〇点について、HiCAT Plusを介してWeb公開した（二〇二四年九月）。
- ・岡山大学附属図書館の協力により、岡山大学附属図書館所蔵「池田家文庫史料」の史料画像約二、三三〇点について、HiCAT Plusを介してWeb公開した（二〇二五年三月）。
- ・都城島津邸所蔵「都城島津家史料」の史料画像三、九三五点について、HiCAT Plusより追加公開（Web公開）した（二〇二四年四月）。
- ・海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」の史料画像一、九四一点について、HiCAT Plusより追加公開（Web公開）した（二〇二四年四月）。
- ・HiCAT PlusよりWeb公開したデータ件数は一八、一八八件であり、うち新規データは一、八三六件だった。

2 データベース公開

二〇二四年八月、新たなデータベースとして「南北朝遺文フルテキストデータベース」を公開した（データベース担当者：堀川康史准教授）。『南北朝遺文』（東京堂出版刊）の既刊分全二冊に収録された全史料二〇、三五六点の目録・本文データが搭載されている。

3 新たなプロジェクト

・二〇二三年一月より開始したサントリーホールディングス株式会社との共同研究「時空間を越えたコミュニケーションに関する研究」は、織田信長が相手と同じ空間にいるように対話し、酔っている状態を再現し、飲み会のように高揚した対話をバーチャルに実現し、織田信長のバーチャルな人格を作り上げ、対話する研究を行うものである。研究目的を実現していくため、本所では、史料編纂所データベースから織田信長に関わるデータを提供するためのAPI（Application Programming Interface）を構築し、さらにそれ以外の研究資源からのデータ提供についても取り組んでいる（所内担当者：金子拓教授）。

・JSPS 科研費基盤研究(S)「史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立」(科研費代表者：山田太造准教授、実施期間：二〇二四～二〇二八年度)は、日本列島に関わる史料を時代横断・地域横断の観点で分析可能なデータとして蓄積・管理・共有し、過去から現在を、多々の分野をシームレスにつなぐデータインフラストラクチャーとして成長させる日本列島記憶継承モデルの確立を目指している。これらの研究においては、AIOCRを活用した史料・史料集(刊本)のテキストデータ作成・提供や異分野研究融合などに取り組むことを予定している。

・人文科学とコンピュータシンボジウム(二〇二四年一月、東北大学)において、小風綾乃特任研究員・中村覚助教・山田太造准教授が「TEIによる編纂の構造化―『大日本史料』を例に」のポスター報告をおこない、「じんもんじん二〇二四ベストポスター賞」を受賞した。

4 原本情報資源化ミニユニット

島津家文書のプロジェクトなど、多様な財源で進行している原本情報に関わる各種プロジェクトの結節点として機能している。二〇二四年度は、共同利用・共同研究拠点一般共同研究三件、JSPS 科研費三件、「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」にかかるユースケース創出課題「異分野共創による史料学DXの確立」(提案代表者：尾上陽介センター長)と連携し、上杉博物館所蔵上杉文書や東北大学文学部所蔵白河文書・奥州市教育委員会所蔵留守家文書の調査など、九件の原本史料調査・分析を行った。成果については、京都府京都文化博物館および鳥取市歴史博物館の特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」への展示協力をはじめ、国内外の学術論文や学会報告・講演等で公開した。

5 研究データ管理

文部科学省「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」のユースケース創出課題として「Archivenaticaを用いた人文科学データのキュレーションプロセスの自動化に関する試み」(提案代表者：中村覚助教)が採択され、二〇二三年度より二年間の予定で実施している。歴史知識高度

利用化ユニットが担当し、研究データの長期的な利活用支援のため、長期保存を支援するソフトウェア Archivematica を用いた人文学データのキュレーションプロセスの自動化に取り組んでいる。「異分野共創による史料学DXの確立」と同様に、研究データエコシステム構築事業シンポジウム二〇二四（二〇二四年一〇月、国立情報学研究所）において、本研究の進捗および成果について報告した。

6 人間文化研究機構デジタル・ヒューマニティーズ関連事業への協力

・二〇二四年四月、前近代日本史情報国際センターは人間文化研究機構が進めるデジタル・ヒューマニティーズ（DH）組織ネットワークキング協議会へ参加した。本協議会は関係機関・組織がDHにおける諸課題について情報共有し議論する場であり、研究者単位ではなく機関・組織単位で参画し、日本におけるDH活動の持続可能なものへの発展と強化を目的としている。二〇二四年度第一回協議会会議（二〇二四年七月、国立民族学博物館）・第二回協議会会議（二〇二五年二月、ビジョンセンター東京虎ノ門）へ参加した。

・文部科学省委託事業「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業」を人間文化研究機構が受託し、「DHコンソーシアムプロジェクト」が開始された。本センターは中核機関である人間文化研究機構DH推進室の協力機関として、さらに連携研究機関である慶應義塾ミュージアム・コモンズが主導する「研究基盤ハブ班（テキストデータモデル）」へ協力機関として参画した。また、DHコンソーシアム全体集会（二〇二五年一月、ビジョンセンター東京虎ノ門）へ参加し、DHコンソーシアムプロジェクト・研究基盤ハブが主催する国際シンポジウム「TEIの現在と実践」（二〇二五年三月）に対して後援した。同じく研究基盤ハブが主催する研究集会「人文学のためのテキストデータ構造化の現状と課題」（同）に対して後援し、参加した。

7 本所出版物のデータ搭載

下記を対象として版面画像の登録を行った。

『大日本史料 第十編之三十一』、『大日本史料 第十一編之三十一』、『大日本古文书 大徳寺文书別集 徳輝寺文书之二』、『大日本近世史料 市中取締類集 三十二』、『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記 十五』

また、二〇二三・二〇二四年度の本所刊行物のうち、古文書フルテキストデータベース・大日本史料総合データベース・近世史編纂支援データベースに本文を掲載する書目について、それぞれのXMLデータの確認を行った。確認したのは次の書目である。

『大日本史料 第八編之四十五』、『大日本史料 第九編之三十一』、『大日本史料 第十編之三十一』、『大日本史料 第十一編之三十一』、『大日本古文书 東寺文书之十九』、『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記 十五』。

8 Hi-CAT Plus の目録整備

・前年度に引き続き、図書部史料情報管理チームの協力の下、目録室の学術専門職員により、西暦架・マイクロ架の目録作成（冊）と登録をすすめた。「華頂要略」「撰要永久録」などの国内マイクロ四一件と、「イギリス国立文書館所蔵海軍省文书」「フランス外務省所蔵日仏外交関係文书」の海外マイクロ六四件について、それぞれ目録を修正した。

・図書部史料情報管理チームにより、ポーンデジタルの仮目録新規二〇四件（所内非公開も含む、昨年度二五二件）、および一点目録新規二五二件（昨年度三件）が登録された。また、一点目録の仮目録からの差替四六件、仮目録の修正二〇件、一点目録の修正一五件を行った。

共同利用・共同研究拠点

二〇一〇年度より開始された「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」は、二〇二二年度より第四期が始まり本年度は三年目を迎えることとなった。拠点の研究活動には、拠点が設定した課題について所外に広く共同研究者を公募する特定共同研究と、所外の研究者グループに対し研究課題の公募を行う一般共同研究の二つの区分があり、各課題は東京大学史料編纂所協議会での審議を経て採択決定されている。本年度の協議会は、二〇二四年九月一

七日・二〇二五年三月七日の二回、対面にて開催した。

二〇二四年度の特定共同研究は、①古代史料領域「奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究―小川八幡神社大般若経を核として―」（二〇二二～二〇二三年度）、②中世史料領域「賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究」（二〇二二～二〇二四年度）、③近世史料領域「近世大名家臣家史料の「読み直し」と研究資源化」（二〇二三～二〇二四年度）、④海外史料領域「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」（二〇二二～二〇二五年度）、⑤複合史料領域「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」（二〇二二～二〇二四年度）の五件であり、延べ人数にて四八名の所外研究者と、二〇名の所内研究者が参加した。また、一般共同研究は二五件の課題を採択し、延べ人数にて一三〇名の所外研究者と、七六名の所内研究者が参加した。

本拠点共同研究では、大学や国立の研究機関のみならず、地方自治体の教育委員会・史料館・博物館・資料館をはじめ、民間の研究機関や史料原本を所蔵している寺社や文庫などと連携して広く史料情報の収集・公開・研究を進めている。これにより多種多様な日本史史料の研究資源化を果たし、当該分野の研究の発展に資することを目的としている。二〇二四年度は、岩手・宮城・山形・茨城・東京・神奈川・新潟・長野・静岡・滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫・岡山・鳥取・島根・山口・香川・高知・福岡・佐賀・長崎・熊本・鹿児島・沖縄の各都府県、および韓国などにて、史料の調査・蒐集を行った。

その成果については、対面やオンラインで国際研究集会・シンポジウム・研究会等を開催して研究報告をしたほか、書籍として大東敬典著『Sugar and the Indian Ocean World: Trade and Consumption in the Eighteenth-Century Persian Gulf』（ブルームズベリー出版、二〇二四年八月）、顧明源編『比較社会文化叢書48、対馬西山寺文書の研究』（花書院、二〇二五年三月）、賀茂別雷神社史料別編 氏人花押（賀茂別雷神社、二〇二四年二月）が刊行され、各種媒体により研究論文等が刊行・活字化されたほか、『東京大学史料編纂所研究成果報告』シリーズとして三冊の研究報告書がまとめられた。

また、博物館等展示では、展覧会「画鬼 河鍋曉斎×鬼才 松浦武四郎―『地

獄極楽めぐり図』からリアル武四郎涅槃図まで」（静嘉堂文庫美術館、二〇二四年四月一三日～六月九日）、「松尾大社展 みやこの西の守護神」（京都文化博物館特別展、二〇二四年四月二七日～六月二三日）、「松尾大社―みやこの西の守護神―」（鳥取市歴史博物館特別展、二〇二四年七月二〇日～九月一六日）、「泉涌寺における天皇家の葬送儀礼」（泉涌寺宝物館心照殿、二〇二四年七月三〇日～一〇月二七日）、「日米和親条約一七〇周年記念特別展 外国奉行と神奈川奉行―幕末の外務省と開港都市―」（横浜開港資料館、Part1「外国奉行 幕末の外務省」二〇二四年九月二一日～一〇月二〇日、Part2「神奈川奉行 開港都市を治める」二〇二四年一〇月二六日～一二月二四日）、「泉涌寺山内と武家」（泉涌寺宝物館心照殿二〇二四年一〇月二九日～二〇二五年一月二六日）、「慶珊寺と富岡八幡宮の名宝―『大般若経』が語る中世東国史―」（神奈川県立金沢文庫、二〇二五年二月七日～三月二三日）等の展示に協力をし、展示や図録などを通じて拠点研究の成果を学界・社会に発信・還元した。

このほかの各共同研究課題の内容および成果の概要は、本誌「史料研究・成果公開」の「共同利用・共同研究拠点による研究・成果」の項を参照されたい。

デジタル撮影による史料画像データの所在状況や、目録化による作成データは、本所データベースの「所蔵史料目録」[HiCAT Plus]「日本古文書ユニオンカタログ」等にて公開している。史料画像については本所図書閲覧室内の端末にて閲覧に供している。

なお、本拠点に関して、課題の概要、公募（課題・共同研究員）、研究会等の催しの案内、成果物の刊行など、随時本所ホームページ・X（旧ツイッター）にて発信している。トップページの「News & Topics」欄、または「共同利用・共同研究拠点」のページで参照されたい。

【史料編纂所協議会】 （一号委員）

東京大学史料編纂所 所長
同 副所長

尾上 陽介
末柄 豊

(二号委員)

東京大学史料編纂所

附属画像史料解析センター長

情報処理主幹

同 研究企画委員会委員長

(三号委員)

京都大学大学院文学研究科教授

慶應義塾大学文学部教授

元立教大学文学部特任教授

東京大学大学院人文社会系研究科教授

九州大学基幹教育院教授

国文学研究資料館研究部教授

立命館大学文学部特命教授

広島大学大学院人間社会科学研究科教授

愛知大学文学部教授

奈良大学文学部教授

箱石 大

金子 拓

松澤 克行

上島 享

小川 剛生

木村 直也

高橋 典幸

福田 千鶴

藤實久美子

本郷 真紹

本多 博之

山田 邦明

渡辺 晃宏

IR・広報室

史料研究の成果を広く公開・発信することは編纂所の重要な目的・特徴のひとつであり、この機能を強化する必要があると求められるようになってきた。そのため、二〇一九年四月に「IR・広報室」を設置し、三名の室員を配置している（平澤加奈子・IR・広報担当、三島暁子・編集担当、糸賀優理・IR・編集担当）。各担当の役割および二〇二四年度の業務詳細については以下の通りである。

〔IR・広報担当〕 東京大学認定シニアURAとして、拠点研究活動の諸指標に基づく点検・評価を日常的に実施した。また、JSPS科学研究費補助金など、外部資金の獲得に向けた説明会を開催するなど、研究経費の多様化や研究環境整備に積極的に取り組む、研究活動の支援体制の強化を図った。近年EAJRS（日本資料専門家欧州協会）年次大会においてブースを設置

し、海外の研究者や研究機関のメンバーへの広報活動も積極的に行なっている。東京大学オープンキャンパスにおけるライブ配信・中学校や高等学校からの史料編纂所への訪問希望はコロナウィルスの影響が減少するとともに年々増えており、これらの対応を広報委員とともに行なった。

また、全学のURAネットワーク（UTRA）やふちけんWG・研究データーマネジメントWGなど、全学の認定URAネットワーク内においても積極的に活動を行った。二〇二四年九月から二五年三月までは本部リサーチ・アドミニストレーター推進室OJD実施者としてオープンサイエンスの推進・若手研究者・学際研究の支援を本部にて行なった。そのほか、通年で関与している業務としては次のとおり。

概要要求対応／学内第二次配分対応／共同利用・共同研究拠点二〇二三年度実施状況報告書作成作業・同中間評価資料作成作業／外部資金獲得に向けた研究会開催／外部資金情報収集・提供／外部資金申請サポート／Researchmap代理登録作業／JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業（以下データインフラ）運営サポート／プレスリリース対応／本部広報記事作成作業／取材対応／オープンキャンパス所内担当／史料編纂所グッズ作成／UTCCとの連携／本所広報関連問い合わせ対応／『東京大学史料編纂所要覧二〇二四年』（日本語版）／『東京大学史料編纂所要覧二〇二四—二〇二六』（英語版）

○会議等出席

（所内）研究会画委員会／財務企画小委員会／情報センター運営委員会／データインフラ関連会議／東アジア史料研究編纂機関国際学術会議準備小委員会／仕様策定委員会／リプレイスWG／史料学協創センター設立準備小委員会／外部評価実施小委員会／史料編纂所協議会

（所外）URA連絡会議・ふちけんWG／部局広報事務担当者連絡会

（学外）文部科学省学術審議会各種部会・専門委員会（研究環境基盤・研究費・人文学・社会科学特別委員会など）／JINSHANネットワーク関連情報共有会・シンポジウム／RUCコンソーシアム／RA協議会大会

〔編集担当〕 本所の年次発行物（東京大学史料編纂所所報・同研究紀要・同要覧）の編集を担当し、成果公開の円滑化を図った。

『東京大学史料編纂所要覧二〇二四年』（日本語版）／『東京大学史料編纂所
所報』五九号／『史料編纂所研究紀要』三五号
○会議等出席

（所内）所報紀要委員会

（IR・編集担当）本所の年次発行物（東京大学史料編纂所要覧）の編集を
担当するとともに、所内の研究業績収集業務にあたった。

『東京大学史料編纂所要覧二〇二四年』（日本語版）／『東京大学史料編纂所
要覧二〇二四—二〇二六』（英語版）／Researchmap代理登録作業／評価資
料作成時の研究業績収集
○会議等出席

（所内）外部評価実施小委員会

図書部

史料編纂所は史料研究・編纂を進めるために、明治初年から現在にいたる
まで、国内外日本史関係史料の調査・蒐集を続けてきた。

寄贈・移管・購入等によって受け入れた原本史料・写本は、国宝一件、重
要文化財二〇件を含め、二〇万点を超える。また、各地に所蔵される史料を
調査し、筆写・撮影をはじめとするさまざまな方法で複製を作成して、書庫
に蓄積してきた。各種複製史料の数も、一八万件に及ぶ。また、日本史を中
心に歴史関係の研究書・地方史・雑誌類を蒐集している。蓄積された図書・
史料は閲覧室で公開されている。

史料編纂所図書部は、1図書・史料の受入れと管理、2史料のデジタル化
と画像公開、3所蔵史料の複製・掲載・放映申請及びその他の問合わせへの
対応、4所蔵史料の展示のための貸出し（出陳）、5書庫及び閲覧室の管理
などの業務によって、史料編纂所の研究事業および共同研究・共同利用拠点
としての機能を支える役割を果たしている。

二〇二四年度には、新型コロナウイルス感染症による全学的な活動制限が
前年度中に撤廃されたことに伴い、四月から閲覧室の開室日を週四日に戻し、
さらに一〇月からは貴重書閲覧を除いて事前予約を不要としたことで、ほぼ

コロナ前の状況に復することができた。また、史料・図書の管理運用や複製
申請への対応などの方法についても、日常的に見直しを行い、整備に努めて
いる。

史料画像のデジタル化促進とデータ公開拡張の重要性はますます大きく
なっている。図書部では「史料画像デジタル化進捗管理システム」を用いて、
所蔵マイクロフィルムのスキヤニング画像、所蔵史料及び探訪調査等による
所外史料のデジタル撮影画像の番号付与からサーバーへの登録までの一貫し
た管理を担っており、マイクロフィルムのスキヤニングや、東京大学デジタ
ルアーカイブズ構築事業などにより、本所所蔵史料の新たな画像を所蔵史料
目録データベースから公開している。二〇二四年度からは、毎月、同デー
タベースから新規に画像を公開した史料のリストを本所ホームページのニュ
ース欄等に掲載し、周知に努めている。

特に近年は、二〇一九年度から二〇二二年度までおこなわれた人文学・社
会科学データインフラストラクチャー構築推進事業と、その後継事業として
二〇二三年度から始まった同強化事業、さらには大型科研等の活動により、
史料画像のデジタル化とデータ公開が急速に進展しており、図書部の史料情
報担当者が各種協議に参加し、研究部と密接に連携して方針や手順に関する
情報を共有することに努めている。また、公開環境が急激に変化しつつある
状況のなか、史料探訪にご協力いただいた所蔵者の個人情報に配慮し、その
意向を尊重しつつ公開を進める新たな方策の運用を開始している。

図書・史料現物の受入れと整理、蔵書の点検、閲覧室の環境維持、史料及
び書庫の管理・保全などの業務にも細心の注意を払いながら取り組んでいる。
未整理史料については整理を進め、燻蒸して配架している。各地の博物館等
への出陳や、出版社・報道機関等からの掲載要請についても対応している。
史料の管理保全に関しては、スキヤニングや出陳と連動して、史料保存技
術室と連携しつつ必要な修理・再装備・再配置等を行なっている。蔵書点検
についても、日常業務と並行して柔軟な体制で必要な点検を実施している。

書庫の老朽化・狭隘化については、依然として懸案であり、抜本的な改善
ははなはだ困難だと言わざるを得ないが、書架の配架状況や安全面の見直し、
耐震対策の拡充などを継続的に行い、さらなる改善を進めている。

現有的人的資源に限りがある一方、図書部に期待される業務は多様化しており、負担は過重となっている。効率化を進めつつ、業務内容の整理に努めている。史料編纂所図書部が果たす役割の重要性を研究者コミュニティおよび多様な利用者の方々に理解していただく努力を継続するとともに、所内の研究部・技術部・各センターとの連携をより緊密にし、課題を共有することが求められている。

以下、二〇二四年度の業務の遂行状況を述べることにする。

一 貴重書庫の温湿度管理

(一) 常時温湿度の監視を行い安定に努めている。特別資料庫(経済学研究科学術交流棟地下二階)は遠隔監視を行っている。

二 原本史料等の管理

(一) 未整理史料の整理を進めた。貴重書「官宣旨写(左弁官下文写)」(〇〇七一―七五)、「応仁以後大乱記」(S〇〇七二―六)等一点の整理が終了した。

(二) 国宝「島津家文書」のうち「歴代亀鑑」の修理が完了した(株式会社修護)。二〇一九年度より継続して、「往復」(史料編纂所の史料収集記録)のうち修理・撮影が完了した分を特別資料庫に配架している。

(三) 新規受入史料、返却史料、寄託史料等の燻蒸を業者委託により実施した。書庫内環境の整備、狭隘化対策

(一) 月に一回の書庫内環境整備・清掃を職員の手により実施している。

(二) 書庫一〜七層の空調機器(デシカ)は、不具合が発生する都度、業者に修理を依頼している。

(三) 耐震対策として、二〇一九年度から書庫内書架に落下防止シートを設置している。これまで三〜五層・七層の設置が済んでおり、二〇二四年度は一層に設置した。

四 デジタル化への対応

(一) 本所蔵史料の画像四、六二七点(六九、〇五三コマ)について、所蔵史料目録データベースから公開を行った。

(二) 東京大学デジタルアーカイブズ構築事業「島津家本」のデジタル化

により、一四九点(一四、八五〇コマ)の撮影・画像公開を行った。

(三) 四〇〇〇番台写本類については、二〇一九年度作成の指針に則り、所外において業者委託撮影を行った。撮影画像一八八点(一二、五六九コマ)は二〇二五年度に所蔵史料目録データベースから公開予定である。

(四) 特殊蒐書「森潤三郎氏旧蔵史料」の画像一五六点(三五二コマ)を所蔵史料目録データベースから公開した。

(五) 二〇二〇年度より撮影・画像公開を行っていた、特殊蒐書「史談会本」については、全史料二、一二二点(一二三、八九一コマ)の公開作業が完了した。

(六) 拓本(架番号一〜二三三四)については、二〇一九年度より撮影を行い、三二〇八点(三、五一九コマ)の画像登録が完了した。二〇二五年度に所蔵史料目録データベースから公開予定である。

(七) サーバー(Archub)への画像のアップロードおよび簡易検索目録の作成を行った。画像のアップロード件数は次の通り。

① 国内探訪マイクロスキニングデータ 一フォルダ 六二四コマ
② デジタル撮影データ 四八七フォルダ 一三三、四〇〇コマ

(八) 探訪調査のデジタル撮影データ(四七五件)をHiCAT Plusに登録した。業務の見直しと事務改善および利用サービス向上への取り組み

(一) 所外開室日を週四日に拡大し、二〇一九年度までと同様にあらかじめ年間の開室スケジュールを作成し、所内外に周知することとした。

(二) 新任者向けの案内も兼ねた、図書部ポータルサイトの図書室利用案内の整備や新入所員・研究員向けに配布する「図書室利用案内」(所内用)の改定を行った。

六 蔵書点検・図書資産実査の実施

(一) 四月八日(月)〜二二日(金)の五日間実施した。事前作業は日常業務と並行して行った。

(二) リストとの照合点検は、書庫五層の特別参考図書、書庫六層の写本類(七〇〇〇架・IWA・O・TOKOROを除く)および書庫九層の貴重書(貴架・模写)、特別収蔵庫史料について実施した。その他については、棚並びの点検、棚清掃を行った。

(三) 本年度の不明図書は〇冊である。

(四) 蔵書点検期間に書庫四層の刊本(分類一〇四〇～一〇四一・三四)について図書資産の実査(十ヵ年計画の第二次)を実施した。確認できなかった図書資産(一冊)については、次年度の実査で再確認作業を実施する。

七 受贈・受託・寄託・借用・出陳関連業務

(一) 受贈 七件(中山尚彦、飯倉晴武、新田一郎、安宅望、大藏八郎、松木淑子、田村英恵)

(二) 受託 更新一件(岩瀬忠震関係史料・瀧川忠征関係史料)

(三) 借用 三件(尼子絢那、太陽コレクション、水戸市立博物館)

(四) 出陳 一九件八三点(都城島津邸ほか)

八 利用・申請件数

(一) 所外来室者数 一、五三二名

学内者延べ五六四名 学外者延べ九六七名

史料・図書請求回数延べ一、五九五回

(二) 文献複写件数

学内四六五件 学外一、〇五六件 計一、五二二件 五八、四七五枚

(三) 申請件数

① 翻刻・復刻 四件 一九点

② 掲載(印刷物・AV資料) 二四五件 七二四点

③ 放映 一六一件 三二七点

④ 展示(パネル等) 三九件 六二点

⑤ インターネット公開 一五五件 三二二点

⑥ 複製 一四二件 五〇二点

(うち、デジタルデータでの提供 五六件 一八五点)

九 視察・見学者のための案内・展示業務

書庫見学者総数 二五件 二二九名

一〇 展示の手伝い・記録保管

木展、オープンキャンパス展示は昨年度と同様実施しなかった。

一一 新型コロナウイルス感染症対応

(一) 閲覧体制および業務体制

- ・ 四月から完全予約制を継続しつつ、学外者の利用を週四日に拡大した。
- ・ 一〇月から貴重書閲覧を除き事前予約を不要とし、閲覧席数・閲覧用端末数を新型コロナウイルス感染症対応以前の数に戻した。
- ・ 在宅勤務の併用、積極的な年次有給休暇取得。

(二) 感染拡大防止対策

- ・ 閲覧室入口、書庫内、図書事務室に消毒液設置。
- ・ 閲覧カウンターに飛沫防止用パーテーション設置。
- ・ 閲覧室内、書庫内の筆記用具を撤去(三月に書庫用筆記用具の設置再開)。
- ・ 一部の利用者サービスをオンライン化。
- ・ 事務室内の「三密」を避ける工夫(室内常時換気、事務室以外の作業スペース確保)。

史料保存技術室

史料保存技術室では、研究者と共に全国に散在する史料を調査・撮影し、歴史史料の複本作成や原本史料の保存修理に関する業務を行っている。これらの業務については、修理・模写・影写・写真の各担当者から年度当初に活動計画が運営委員会に提出され、委員会での検討を経て技術部長より教授会で報告された。

活動の詳細は以下の通りである。

《修理》

○修理

源頼朝下知状(S貴〇一一・一三) 一軸

蜷川親元日記断簡

入来院文書(巻六・八・九・一四) 四卷

益田家文書 五卷

海道諸国記 一冊

後七日記 一卷	一点	南朝文書（鳥取市歴史博物館）
湯原文書 九卷	九点	白河文書（東北大学図書館）
上杉景勝書状	一点	伊江御殿伝世品のうち尚育王書簡・伊江王子書簡・与那城王子書簡・玉川王子書簡・池城親方書簡八通（那覇市歴史博物館）
永青文庫所蔵「信長公御状写」 一卷	一点	中山王書簡・進上品目録（沖縄県公文書館）
水戸市立博物館寄託「戦国武将書簡集」 一卷	一点	琉球国王辞令書（宮古島市総合博物館）
福智院家文書 一冊	一点	山内家資料（高知城歴史博物館）
細川幽斎画像（模写）	一点	留守家文書（奥州市水沢図書館）
至徳三年舜助授真恵印信	一点	菅浦文書（滋賀大学経済学部附属史料館）
大武秀斎関係文書のうち「慶応辰年三月より風聴書認」 一冊	一点	東寺百合文書（京都府立京都学・歴史館）
熊澤家文書（額装・冊子）	四点	上杉家文書（米沢上杉博物館）
織田信長書状（二通）・豊臣秀吉書状（二通）（個人蔵）	四点	関沢家紙見本（茨城県立歴史館）
上杉謙信書状	一点	近藤重蔵関係資料のうち東寺関連文書（四―三八二等）四通、同蒙古襲来絵詞写（四―二五四）一卷及び写本類のうち称名寺并東寺文書 写（四〇―一五四）（依頼調査）
近江国愛知庄立券文 一卷	一点	島津家文書「御文書」のうち宣旨・女房奉書 六二点
○裏打		島津家文書「御文書」のうち琉球国王書状等琉球関連文書 二九卷
加納家史料 二冊	二点	小笠原文書（S〇六七―一七一二）（保存用カバーの製作を含む） 三二点
琉球薩摩往復文書案 一冊	一点	○その他
本草綱目 三冊	三点	放送大学史料撮影（島津家文書「御文書」・入来院文書）
春林宗俣和尚等法語 一冊	一点	島津家文書のうち「国統新龜鑑」一帖・「歴代龜鑑」修理中（赤外）撮影補助（取り扱い）
○手当		史料編纂所カレンダー撮影の史料養生
島津家文書「正保薩摩国絵図写」「元禄薩摩国絵図」 二舗	二点	修理監督（島津家文書「歴代龜鑑」「宝鑑」）
旧北白川宮蔵「覚書」（豊臣秀吉関連資料・個人蔵） 一冊	一点	蓬左文庫所蔵「銅人経」修理調査（依頼調査）
明通寺宛延暦寺法華堂下文（貴三―三三四 一通二紙）	一点	
宇波西神社文書	一点	
○撮影解装・綴じ直し		
延時文書（冊子）	一点	
○料紙調査		
泉涌寺額字（伝張即之書「泉涌」）・織田信長書状・豊臣秀吉書状（京都泉涌寺）		
櫻本坊大般若経・如意輪寺文書・金峯山寺文書（吉野櫻本坊・如意輪寺・金峯山寺）		
		（高島晶彦・山口悟史）
		○模写
		○模写

「東京国立博物館所蔵長篠合戦図屏風」下描き 第三幅他 四点
○図案制作

二〇二五年度要覧和文表紙作成 一点
○色料・表現等調査
大日本沿海輿地全図（中図） 八点
（村岡ゆかり）

〈影写〉

○影写 中院一品記 卷二 紙背文書 三点
織田信長自筆書状（益田家文書） 一点

○筆跡調査 中院一品記 一点

上杉家文書（米沢市上杉博物館）
小川八幡神社大般若経（和歌山県立博物館）

菅浦文書（滋賀大学経済学部）
今堀日吉神社文書（滋賀大学経済学部）

善通寺所蔵聖教（善通寺宝物館）
神原文庫資料（香川大学）

○画像センタープロジェクト 電子くずし字字典データベース開発プロジェクトにおける、くずし字代

表字形の抽出作業および切り出し画像等の監修 一九六、八六〇件
花押纂彙等の花押画像データベース統合化プロジェクトにおける、花押

画像データの集積作業および切り出し画像等の監修 三、八八九件
○その他

〈墨書業務〉 題箋・内題・奥書・扉書等 四点
（宮崎肇）

〈写真〉

○デジタル画像 撮影・現像 等
国統新亀鑑 醍醐寺文書 本所所蔵貴重書 他

撮影数 四、〇四〇カット
画像処理数 九五、九三九カット
スキャン・画像処理 七カット
（谷昭佳・高山さやか・桑田恵里）

①史料保存技術室主催講習会
所員を対象とした講習会を開催し、総計一二名の受講があった。

第一回 影写講習会 六月二四日 場所―四〇六号室
第二回 模写講習会 六月二四日 場所―四〇七号室
第三回 原本取り扱い講習会 六月二四日 場所―四〇八号室
第四回 写真室ガイダンス 七月九日 場所―三〇九号室

②見学における制作実技及び作品発表
国内外の来賓等の来所に際し、技術部として制作実技及び作品発表を行った。なお、全室での対応の場合は室名を記していない。

二〇二四年四月 五日 中国政法大学法律古籍整理研究所（修理室） 計五名

五月一〇日 東京大学人文社会系研究科（修理室・写真室） 計七名

五月二四日 文科省行政実務研修生（修理室） 計七二名
六月一二日 フランス国立ギメ美術館（修理室） 計三名

七月二一日 岡山朝日高等学校（修理室・影写室・模写室） 計一〇名
七月二六日 鹿児島ラ・サール中学校・高等学校（修理室） 計一七名

八月 一日 小松高等学校（修理室） 計四名
八月二八日 立教大学（修理室・模写室・写真室） 計一二名

九月 六日 沖縄名桜大学（修理室） 計八名
横須賀高校（修理室） 計九名

一〇月二九日 ソウル大学校奎章閣韓国学研究院（修理室）

二月二六日	立命館大学（修理室・影写室・写真室）	計一四名
三月三日	東京大学人文社会科学系研究科（修理室）	計二名
三月一九日	学習院大学（写真室）	計一二名
二月二〇日	早稲田大学教育学部（修理室・影写室・模写室）	計九名
二月二五日	立命館大学（修理室・模写室）	計一四名
二月二九日	富山県立砺波高等学校（修理室）	計二名
二月二九日	龍谷大学大学院文学研究科（修理室）	計五名
二月二九日	東京大学社会連携部（修理室）	計一名
二月二九日	日本大学芸術学部（修理室・写真室）	計六名
二月二九日	東京大学人文社会科学系研究科（修理室）	計九名
二月二九日	東京大学教養学部（修理室・影写室・模写室）	計二名
二月二九日	早稲田大学教育学部（修理室・影写室・模写室）	計九名
二月二九日	立命館大学（修理室・影写室・写真室）	計一四名
二月二九日	東京大学人文社会科学系研究科（修理室）	計二名
二月二九日	学習院大学（写真室）	計一二名

外部資金一覧

科学研究費助成事業

史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立

研究種目 基盤研究(S)
課題番号 二四H〇〇〇一
研究期間 二〇二四～二〇二八年度
総 額 三、一三三万円
(直接経費二、四一〇万円、間接経費七二三万円)

研究代表者 准教授 山田 太造

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 一九H〇〇五三六
研究期間 二〇一九～二〇二三年度
総 額 一三二万円(全額繰越額)
(直接経費一三二万円、間接経費〇万円)

研究代表者 教授 菊地 大樹

コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二〇H〇〇〇一〇
研究期間 二〇二〇～二〇二四年度
総 額 六六三万円
(直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円)

研究代表者 教授 山家 浩樹

筆跡・花押情報的高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二〇H〇〇〇二二
研究期間 二〇二〇～二〇二四年度
総 額 五三三万円
(直接経費四一〇万円、間接経費一二三万円)

研究代表者 教授 末柄 豊

外交の世界史の再構築・15～19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二一H〇四三五五
研究期間 二〇二一～二〇二四年度
総 額 五九八万円
(直接経費四六〇万円、間接経費一三八万円)

研究代表者 教授 松方 冬子

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二一H〇四三五六
研究期間 二〇二一～二〇二五年度
総 額 四六八万円
(直接経費三六〇万円、間接経費一〇八万円)

研究代表者 准教授 西田 友広

神社所蔵文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神神社の総合的研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二二H〇〇〇一五
研究期間 二〇二二～二〇二六年度
総 額 五〇七万円
(直接経費三九〇万円、間接経費一一七万円)

研究代表者 教授 金子 拓
荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二二H〇〇〇一六
研究期間 二〇二二～二〇二六年度
総 額 一一四四万円
(直接経費八八〇万円、間接経費二六四万円)
研究代表者 准教授 井上 聡
「古文书科学」の応用実践

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二三H〇〇〇一一
研究期間 二〇二三～二〇二七年度
総 額 九四九万円
(直接経費七三〇万円、間接経費二一九万円)

研究代表者 特任助教 渋谷 綾子
大型絵図類のデータ構造化と関連史料の連携による南西諸島「海上の道」の復元的研究

研究種目 基盤研究(A)
課題番号 二三H〇〇〇一一
研究期間 二〇二三～二〇二六年度
総 額 一一四四万円
(直接経費八八〇万円、間接経費二六四万円)

研究代表者 教授 黒嶋 敏
近世書状史料群の研究と歴史情報資源化
研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二三K二一九六三
研究期間 二〇二三～二〇二五年度
総 額 二四七万円

(直接経費一九〇万円、間接経費五七万円)
研究代表者 教授 松澤 克行
幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史料学の構築

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二三K二五三五一
研究期間 二〇二三～二〇二六年度
総 額 三九〇万円
(直接経費三〇〇万円、間接経費九〇万円)

研究代表者 技術専門員 谷 昭佳
16世紀西日本港町の構造と相關―文献・考古学資料の国際・横断的分析による―

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二三K二五三六〇
研究期間 二〇二三～二〇二六年度
総 額 六三七万円
(直接経費四九〇万円、間接経費一四七万円)

研究代表者 准教授 岡 美穂子
維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二三K二五三六一
研究期間 二〇二三～二〇二七年度
総 額 二八六万円
(直接経費二二〇万円、間接経費六六万円)

研究代表者 教授 箱石 大
繰越額五三万円

摂関家伝来大規模史料群の目録精緻化による構造の解明と研究資源化

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二三K二五三六二
研究期間 二〇二三～二〇二七年度
総 額 三十七万円
(直接経費二九〇万円、間接経費八七万円)

研究代表者 教授 尾上 陽介

東アジア歴史資料の学術資源化と保全に関する国際交流の推進研究

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二四K〇〇〇九八
研究期間 二〇二四～二〇二六年度
総 額 三三八万円
(直接経費二六〇万円、間接経費七八万円)

研究代表者 教授 杉森 玲子

幕末維新期史料研究の学術資源化推進と国際共有基盤の新展開

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二四K〇〇二〇八
研究期間 二〇二四～二〇二六年度
総 額 七二八万円
(直接経費五六〇万円、間接経費一六八万円)

研究代表者 准教授 小野 将

「原本史料情報解析」の手法による益田家文書を中心とした中世武家文書の
史料学的研究

研究種目 基盤研究(B)
課題番号 二四K〇〇一〇九
研究期間 二〇二四～二〇二七年度
総 額 四二九万円
(直接経費三三〇万円、間接経費九九万円)

研究代表者 准教授 村井 祐樹

日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

研究種目 基盤研究(C)
課題番号 二〇K〇〇九三三
研究期間 二〇二〇～二〇二四年度
総 額 六五万円
(直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 准教授 遠藤 珠紀

東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―

研究種目 基盤研究(C)
課題番号 二二K〇〇八三七
研究期間 二〇二二～二〇二五年度
総 額 一〇四万円
(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 稲田 奈津子

徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―

研究種目 基盤研究(C)
課題番号 二二K〇〇八七二
研究期間 二〇二二～二〇二四年度
総 額 一三〇万円
(直接経費一〇〇万円、間接経費三〇万円)

研究代表者 教授 及川 亘

預人の政治的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究

研究種目 基盤研究(C)
課題番号 二二K〇〇八九一
研究期間 二〇二二～二〇二四年度
総 額 一三万円
(直接経費一〇万円、間接経費三万円)

研究代表者 准教授 荒木 裕行

近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―

研究種目 基盤研究(C)
課題番号 二三K〇〇八〇九
研究期間 二〇二三～二〇二五年度
総 額 一四三万円
(直接経費二一〇万円、間接経費三三万円)

研究代表者 教授 小宮 木代良

中近世移行期の版本刊行からみた禅宗寺院の蔵書形成と知識入手の研究

研究種目 基盤研究(C)
課題番号 二四K〇四二二二
研究期間 二〇二四～二〇二七年度
総 額 一〇四万円
(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 川本 慎自

日本近世における政教関係の形成と確立

研究種目 若手研究
課題番号 二一K一三〇九〇
研究期間 二〇二一～二〇二四年度
総 額 六五万円
(直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 准教授 林 晃弘

今川了俊関係史料の分析による室町幕府地方支配の研究

研究種目 若手研究
課題番号 二三K一三二七三
研究期間 二〇二三～二〇二六年度
総 額 一〇四万円
(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 堀川 康史

中世京都における商人の権利と組織

研究種目 研究活動スタート支援
課題番号 二三K一八六九九
研究期間 二〇二三～二〇二四年度
総 額 六五万円
(直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 助教 谷本 隆之

律令国家成立期における軍事体制の特質とその形成の意義

研究種目 研究活動スタート支援
課題番号 二四K二二五二六
研究期間 二〇二四～二〇二五年度
総 額 一一七万円
(直接経費九〇万円、間接経費二七万円)

研究代表者 助教 古田 一史

近世後期の朝廷をめぐる政治文化の研究

研究種目 特別研究員奨励費(外国人)
課題番号 二二KF〇一〇七
研究期間 二〇二二～二〇二四年度
総 額 二〇万円
(直接経費二〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 荒木 裕行 (日本学術振興会外国人特別研究員 KIM, Hyungjin)

日本近世「公家」再考

研究種目 特別研究員奨励費
課題番号 二三KJ〇三四八
研究期間 二〇二三～二〇二五年度
総 額 九一万円
(直接経費七〇万円、間接経費二一万円)

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 林 大樹

日本中世における交通像の復元―境界地域に着目して―

研究種目 特別研究員奨励費

課題番号 二三KJ〇八二一

研究期間 二〇二三～二〇二五年度

総 額 一三万円

(直接経費一〇万円、間接経費三万円)

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 鈴木 沙織

室町戦国法史論

研究種目 研究成果公開促進費(学術図書)

課題番号 二三HP五〇六六

研究期間 二〇二四年度

総 額 一九〇万円(全額繰越額)

(直接経費一九〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 前川 祐一郎

大日本史料総合データベース(平安時代・全文)

研究種目 研究成果公開促進費(データベース)

課題番号 二四HP八〇〇三

研究期間 二〇二四年度

総 額 三二〇万円

(直接経費三二〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 新井 重行

〇期間延長(新規の研究費の交付はなし)

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

研究種目 若手研究

課題番号 二〇K一三一七二

研究期間 二〇二〇～二〇二四年度

研究代表者 准教授 岡本 真

受託研究

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

委託者 福岡市史編集委員会

研究期間 二〇二四年度

研究経費 五八万円

研究担当者 准教授 稲田 奈津子

准教授 岡本 真

高知県域に関する古代・中世史料の調査・収集と分析研究

委託者 高知県

研究期間 二〇二四年度

研究経費 八四万二千六百円

研究担当者 准教授 井上 聡

准教授 岡本 真

AI等の活用を推進する研究データベース構築事業

委託者 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構

研究期間 二〇二四年度

研究経費 四九二万円

研究担当者 教授 尾上 陽介

AI等の活用を推進する研究データベース構築事業

委託者 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構

研究期間 二〇二四年度

研究経費 三二五万円

研究担当者 助教 中村 覚

人文学・社会科学データベース構築強化事業

委託者 独立行政法人日本学術振興会

研究期間 二〇二四年度

研究経費 二五三三万円

研究担当者 教授 尾上 陽介

デジタル・ヒューマニティーズ（DH）ツール構築委託事業	
委託者	大学共同利用機関法人人間文化研究機構
研究期間	二〇二四年度
研究経費	二〇〇万円
研究担当者	特任研究員 小風 綾乃
寄付金	
研究期間	二〇二四年度
受入件数	一件
受入金額	一二四〇万円